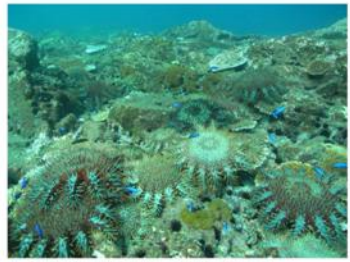
オニヒトデの大発生

海の温暖化に伴うサンゴの増加は、サンゴを食害する生物の分布拡大にもつながります。近年、高知県を含む四国の太平洋岸ではサンゴを好んで食べるオニヒトデが大発生しており、生態系や海域資源の保全を考える上で大きな問題となっています。

■オニヒトデってどんな生き物？

オニヒトデは太平洋・インド洋の暖かい海に広く分布する大型のヒトデです。オニヒトデも豊かなサンゴの海の生態系を構成する大事な生き物の一つですが、時に大発生して餌であるサンゴを食い尽くしてしまうことがあります。

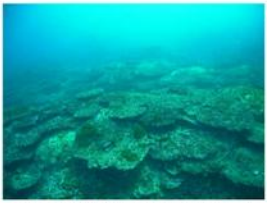
▲ オニヒトデの標本写真
オニヒトデの全身を覆う鋭い棘には強い毒があり、人間にとっても怖い生き物です。



▲ 集団となってサンゴを食べるオニヒトデ
1個体のオニヒトデは1年に10㎡のサンゴを食べるといわれており、仮に1,000個体のオニヒトデ集団があった場合、1年で1haのサンゴが失われることになります。なお、オニヒトデの越冬には15℃以上、繁殖には26℃以上の水温が必要といわれており、サンゴ豊かな暖かい海でないとオニヒトデは暮らしていけません。

■大発生の影響

ひとたび、オニヒトデが大発生すると広い範囲のサンゴが食害を受けて、死滅してしまいます。沿岸生態系の土台であるサンゴの減少は、景観の劣化や生物多様性の低下、そして資源量の減少など、海の豊かさの低下につながり、観光業や水産業をはじめとした人間の生活にも大きな影響を与えます。



▲ 食害により死滅したサンゴ（宿毛市沖の島）

▲ オニヒトデの駆除作業（大月町樫西海岸）

▲ 陸揚げされたオニヒトデ（大月町亀ヶ迫）

■四国におけるオニヒトデの大発生と温暖化

四国の太平洋岸では1970年代以降、オニヒトデの大発生が確認されるようになりました。2004年頃に始まった近年の大発生では、1970年代にも大発生が確認された四国西南部の足摺宇和海国立公園海域で再び大きな被害が出ています。また今回の大発生では高知県の室戸岬周辺や徳島県の牟岐大島などでもオニヒトデの発生量が多く、駆除が実施されています。このほか県内では窪川町、須崎市、夜須町などでもオニヒトデによるサンゴの被害が確認されており、オニヒトデの分布域は今では県全域に広がっていると考えられます。

オニヒトデ大発生の原因についてはよくわかっていませんが、海の温暖化の影響により、高知の海は昔と比べて、オニヒトデが暮らしやすい環境になってきているということは間違いありません。

足摺宇和海海域における近年のオニヒトデ年間駆除数の推移